

# 京鹿子

第 一 一 六 号  
一 九 八 零 年 八 月 一 日 出 版



8月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その二十三

下闇の抜け穴ひとつ大坂へ

天目の野望の欠片木下闇

手ぐすねの蜘蛛の思案や風の黙

枅形はくノ一好み黒揚羽

文禄の卯建を抜ける走り梅雨

高札の楷書仕立ての街薄暑



参内の揚羽立ち寄る装束司  
その話蒸し返すとは蚊帳を吊る  
香水の二滴三滴悔い一つ  
市街化区域初蟬の存の外  
夏のれん酒壺を枕の下戸ひとり  
造酒司の跡のぞかんと梅雨の蝶  
洛中凶梅雨の出口の見あたらず  
夏蝶の院へ踏みいるあなかしこ

---

近詠

鈴鹿 仁

風のいろいろ

みなづきや風の沙汰聴く虫籠窓

青梅雨や風のみちびく平安史

今日といふ風の中なる天道虫

追憶の風には乗らず梅雨の蝶

はじまりは大雪溪のひとしづく



近詠

和田 照海

雀の子

楷若葉火灯窓より論語読み

雀の子「学而時習之」

初夏の水甕にみづ陶の里

焼き締めの攻め焚き七日の明易き

うつぼ草力ぬきたるの廃れ窯



## 英華採集

濡れ蛇の舌の三寸見てしまふ

福 山 門 井 千 歩

川よりも暮れがかつた薄闇の沼から現れた蛇とした方が、想像が働く。突然目が合った作者に蛇が驚いたのであろうか？言わずもがなの蛇の狼狽は、言い訳のような舌を出す。作者には舌が二枚に見えたに違いない。これは、現代社会にも当てはまる。テレビで何喰わぬ顔で話をする人達の中には、後ろに蛇の姿が映し出されているのかも知れない。「舌の三寸」という表現が効果を上げている。

骨抜いてきつちりたたむ鯉のぼり

大 阪 朝 倉 英 子

端午の節句には、子や孫のために大なり小なりの鯉のぼりを上げる。幼い子供が一年ごとに成長していくように毎年上げる鯉のぼりも、五月の爽やかな風を吸い込んで短い期間の中で大きく育っていくのかも知れない。風を孕んで成長した鯉に骨格が備わったと見立てたところが面白い。その骨を抜いて鯉を労ってやる作者の優しさは、子や孫へ向けられる目と同じである。

コルク栓抜けぬ憲法記念の日

東 京 福 島 照 子

憲法改正の問題が色々取沙汰されている昨今であるが、改正の是非の判断は難しいと言わざるを得ないだろう。そのあたりを上手く表現されたのが掲句の「コルク栓抜けぬ」である。ワインのコルク栓を抜く時は、十分に湿らせる必要があるがそんな方法論では片付けられないのである。ボロボロになってコルク栓が落ちたワインを、誰も飲もうとは思わないだろう。

松本 鷹根



塩貝 朱千

相聞歌

田水張り遠嶺整ふ雨後の里

川風の若葉に憩ひ憂国す

諸苗を植ゑて夜雨に刻委ぬ

鶯と老いを親しむ神の丘

志賀南風波が波追ふ相聞歌

近詠

薔薇

皇帝もアンネも薔薇の園遊会

薔薇は朱にカスタネットが聞こえさう

バツカスの宴はじまる青い薔薇

泣きぬれし日は純白の雨の薔薇

悲しみのあと紅の薔薇ひらく



神麓集

梅雨夕焼 藤岡紫水

瀧

丸井巴水

漁り火の湖上に揺るる五月闇  
愛憎の日日繰り返す夜の四葩  
梅雨夕焼佐渡の荒磯の忘れ汐  
降り足らずなお鳴きつのる雨蛙  
還らざる刻の過ぎゆく蟻地獄

手加減のなき大瀧へ立つ僧伽  
鉄錆の臭ふタオルで拭きし汗  
マネキンの裸体を運ぶ初夏の街  
瀧見台指揮棒振つてみたくなり  
音たてて逃げ足見せず蛇は消ゆ

原爆忌 沼田巴字

一人静

植村蘇星

川いつぱい黒き山影原爆忌  
稲妻や世のはかなさを告げるべく  
突きすすむ生でありたし雲の峰  
法師蟬一木に寄る夕まぐれ  
高階に歩を移してや月見豆

春耕や天与の恵み匂ひ立つ  
名は心一人静の一目惹く  
野遊びとしやれてステツキぶらぶらり  
旭光に極む紫鉄線花  
開発のすすむを愁ひ亀鳴けり



神麓集

想ひ今 北川孝子

風の来て風のかたちの青葉騒  
ゆつくりと猫うら返る薄暑光  
齢にも艶ある暮し夜の薄暑  
想ひ今遠ざかりゆく夜のみどり  
行く雲の影も道づれ青葉どき

海市 直江裕子

陽炎の中からひとり出て来ない  
春愁を風結びしてスカーフに  
海市への切符ひそかに持ち歩く  
名刀の匂ひしたたる春の院  
理不尽を目刺を焼いてお茶漬に

藤房 高木晶子

弁当のかたはらに咲く花大根  
解答の出るまで歩け花見杖  
トンネルは立入り禁止若葉風  
五月晴遠く小さく白い旗  
藤房に触れまつすぐな人ばかり

海道 忌伊藤希眸

万鶏に死神のつく芽吹き雨  
はや杉菜あをを畷を仕掛けぬる  
臍の緒は一粒の石しんきろう  
笑尉しょうじょう面の声のかげろひあれば父  
欄干の陶灯ぼうと海道忌



# 神麓集

鍵 穴 木戸渥子

花菜の沖 井上菜摘子

花吹雪なんと優美なお辞儀かな  
親友が流されてゆく花筏  
某日の胃へ菜の花の胡麻よごし  
鍵穴のはてなマークへメーデー歌  
聞きかじり事に齟齬あり氷菓溶け

菜の花畑抜けてきれいな別れかな  
夭折や花菜の沖へ送り出す  
入園のはしれば全身が鈴  
齧りさしの哲学ひとがたの雪のこる  
潮まねき疎らな拍手にも渾身

前 略 奥田筆子

ふらここ 村田あを衣

句を齧り鉛筆齧り日の永き  
筍の前略といふ届き方  
さくらさくら恋は直線疎水疾し  
止り木にセロリ噛んで桜の夜  
睫毛重き春の駱駝の横目かな

ふらこの着地は母の声の中  
深爪のけふの始末や菜種梅雨  
ペン立てのペン凭れ合ふ蝶の昼  
大壺の闇へ吾が声梅雨明ける  
ガラス玉透かせば五月海のいろ



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

京田辺 山中志津子

同姓を連ね静まる村薄暑  
少年兵たりし翁の顔のどか

電波混む山城平野雉子の恋

散る桜一揆の余熱冷ましをり

たんぽぽの王国風がスキップす

遠景に渡月橋置く水の春

手を振れば応へてくれる山桜

意気投合花菜あかりの真ん中で

山葵田の水より清きあひだから

花わさびつつんつん遠き日の記憶

京都 井尻 妙子

城陽 鷺山 珀眉

葉桜や君住む街へ通り雨  
白々と幣の大振りみどりさす

山神の伝言からすうりの花

竹皮を脱ぐやばあちやるりありてい

短夜のぎこちなく止むオルゴール

東の間をこの葉桜の中にある

永き日のながきを座してもつたいな

清潔な時間のなかにかきつばた

鐘の音の余韻に揺れし手鞠花

黒猫の影も消したり芥子坊主

京都 片山 熙子

明易の思惟の葉をはさみけり  
光陰やはや乱丁のつくつくし  
草笛を鳴らして遠き日に還る  
黙祷す日傘の火照り折りたたみ  
終戦日人住む窓の煌煌と

福 山 亀井 福恵



他人の子の知恵のはやさよ金魚草  
放浪の旅にやつれし夏帽子

青空へ届く万歳初端午

子の巢立ち柱の傷の辿る午後

幼きのあの桜撮る今もなお

藤棚に思ひ出深し吾と子と

冬木立静かにありて空白し

音もなく動かず静か風の庭

雪は解け疲れし眺め哀れなる

冬の部屋黄色い飲みものポカポカと

漸うに山お目覚めかこぶし咲く

園児等の目で追ふ先を春の蝶

物の芽をよけて呉れしか猫の路

いつの間に猫の通ひ路犬ぶぐり

野水仙園児のやうに咲き乱れ

筍を掘りて夕餉の賑かさ

けふ一日良き事ありし春の宵

遅桜山かげに咲き人を待つ

母の日や亡き母の衣を虫干しす

隣家より届く粽にいやされる

今年こそ武者人形と子等を待つ

好物の鰻横目に三回忌

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

札 幌 野村 軻枝

酒 田 藤波 松山

渋 川 東 秋茄子

濡れ蛇の舌の三寸見てしまふ  
目力に負けて蛇退く勝目かな  
小座にゐて椿落つ音石が聴く  
細胞は銀の銭形紙魚の影  
骨抜いてきつちりたたむ鯉のぼり  
葉桜や普通の木となりざわめける  
緑陰に小物商ふフリーマート  
風落ちて網戸にかかる物のなし  
コルク栓抜けぬ憲法記念の日  
地に還る牡丹純白の素心

福 山 門井 千歩

大 阪 朝倉 英子

東 京 福島 照子